

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

[volunteer information]

2012
AUG.

8

VOL.423

平成24年8月1日発行 毎月1回1日発行



特集

知ることが第一歩 みんなで支える発達障害

02



いばらきけん きたつかがわし
茨城県北茨城市

今月の**鼓動**

茨城県北茨城市 「北茨城あすなる会」

東日本大震災は東北3県だけではなく、茨城県にも深い爪痕を残しました。

「人間は一人では生きていけない。つながりの中で生かされているのだ」と改めて痛感したという古茂田昇さん。「北茨城あすなる会」の代表者です。

被災者が103世帯入居してきた雇用促進住宅は、多くの人にとって、初めての場所。初めての近所さん。垣根を取り払うために「あいさつ運動」からはじめ、住民が互いに語り合ったまり場としてサロンを運営し、住民の一体感づくりに注力しています。毛布一枚で避難してきて、自殺も考えたという高齢者も今はこのサロンの常連さんだとか。

「お互いに励まし合い、自分にできることで貢献する。共助の精神が大切と考えます」と古茂田さん。新たな「絆」づくりが今日も進んでいます。

取材日/2012年8月1日

茨城県北茨城市 「北茨城あすなる会」

北茨城市の雇用促進住宅において、「共助」を旗印に自治活動が続ける任意団体。全117世帯のうち、103世帯は3.11の津波被害を受け、入居してきた。全く違う地域から集まった住民たちに共生する意識

を高めてもらい、新たな共同体として機能するように尽力。「あいさつ運動」「たまり場サロン運営」「ラジオ体操」など、他者との関係性を構築するきっかけづくりを継続する。

Contents

ホントは身近なボランティア
横浜市緑区竹山地区
..... 06

突撃訪問！
隣のコーディネーター
(臓器移植コーディネーター)
..... 07

帰ってきた！
あるある質問コーナー
..... 07

保険の広場
つながって広げよう！
事務局だよ
..... 08

心と体のネットワーク

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

知ることが第一歩

～みんなで支える発達障害～

✓考えを伝えるのが苦手。✓気持ちの切り替えが苦手。

✓がんである。✓感情の起伏が激しい。✓飽きっぽい。

これらは発達障害の簡単なチェックリストの一部です。発達障害は、社会生活における苦手の度合いが極端な人につけられた名前です。正しい知識が十分には知られていない中、支援に携わる方々からは「周囲の対応が重要」「もっと知ってほしい」という声が聞かれます。知ることが、私たちにできる支援の第一歩になります。



発達障害を理解し適切に関わるということ



医療法人社団倭会
こころとそだちのクリニック むすびめ
院長 田中 康雄

生物学的・社会的な意味での発達 の中での、個々が抱える生きづらさ

発達障害とはどのような事態を指し示すのでしょうか。

僕は、まず発達という事象を、「人が生きていく過程」であると位置づけています。人が生きていく過程には、喜怒哀楽があります。そのうえで、①生物学的な規則性と準備性

にある程度沿いながら変化し、②社会的・文化的の状況に組み込まれていく過程を、③ある程度のバリエーションを容認したなかで評価されるものを発達とすると、発達障害とは、①生物学的な規則性と準備性において、時間的な早さ遅さ、質的な高さ低さといった差があり、②社会的・文化的の状況から逸脱し、③その程度が現状で容認されない様相と表現してもよいかもしれません。この容認されるかいないかという逸脱の程度は、われわれが共生する社会が、ある程度の均一性、同一性、許容範囲のなかで成立することを意味しています。

医学的に準備される診断基準に添って診断される発達障害が、最近増加傾向にあると指摘されています。これは、①生物学的な規則性と準備性において、時間的な早さ遅さ、質的な高さ低さといった差違と、②社会的・文化的の状況からの逸脱への、評価の差違ともいえないでしょうか。差違と逸脱は確かにこれまでも、これからも存在しているのですが、その存在を個性と呼ぶか、特性と呼ぶか、障害と呼ぶか、は不確実な判断となるでしょう。

僕が発達障害と判断するのは、個々が抱く「生きていく過程に生じる生きづらさ」への評価からになります。

生きづらさに思いを馳せ、 ともに生きる

では、そうした事態への適切な関わりとは、どういったものでしょう。

ひと言で言えば、「生きていく過程に生じる生きづらさ」に関係性をもって接近することということになります。現実には生きているその人を尊重し、注目することから、関わりが始まります。その関わりの方性は、発達障害と規定された世界を生きる方達を、異質として排除する、あるいは遠ざけることであっては、もちろんいけません。それ以上に、その世界からの脱出でもなく、その世界観を持ちながら、安心してともに生きるという、関係性に支えられた共生状況を生み出すことにあります。

僕は、発達障害の世界を学び、生きづらさに思いを馳せ、生きようを重視しつつ継続的に生活相談に乗って行くことが大切なことであると思っています。

そして発達障害があっても生活の障害にしないために、生きづらさに折り合いをつける生活を一緒に探し続ける支援を目指しています。

ケースⅠ 親・家族による支援

仲間との大切な出会い、 助け合い、支え合ってこれたこと… 今があることに改めて感謝しています

兵庫県LD親の会「たつの子」 こうづま とみこ 高妻 富子さん



発達障害児のために、 親の思いを込めた「たつの子」

私たちは、LD(学習障害)の子どもたちが大きく育ち、世の中・人のために役立つ人となることを願って設立された親の会で、現在270名の会員がいます。

活動の一つに情報交換や悩みを出す場としての懇親会があります。発達障害は「親の愛情不足」「家庭環境のせい」との誤解や、周囲の無理解等、身近に相談する人がいない非会員の方も参加でき、孤立を防ぐ場になっています。

その他、勉強会・研修会の開催や、行政や関連機関との連携、機関誌「たつの子」を発行し、情報共有を図っています。会員は保護者であって専門家ではありませんし、組織運営に関しては素人です。そんな中、それぞれに特性・ニーズの違うお子さんをもつ会員を対象に研修会等を企画・運営していくことに難しさを感じたり、財政的な問題にぶつかったりしながらも、仲間と出会い助け合って活動してきました。2年前に「たつの子」の20周年記念誌を作った際には、様々な思い出で、胸一杯になりました。

周囲の理解と“ちょっとした支援”で できることがある

発達障害のある人にとって、就労は大きな問題です。就労自体が難しいということもありますが、働き続ける中での困難もあります。障害があるようには見えないことや、正しい理解がされないために、本人が怠けて



「たつの子」20周年記念講演会

いると誤解されたり、「大学卒なのに〇〇もできないのか」と言われたりすることもあります。

でも、すべてが出来ないわけではありません。例えば一度に言うのではなく、一つずつ、具体的な指示をしてもらい、図示してもらいなど、本人の特性に合った伝え方や関わり方がされれば業務をこなすことができる場合が多いのです。

また、学童期に多くの親御さんが求めているのは、勉強面よりも生活面での支援です。そばにいて方が少し声かけしてくれるだけで、お友だちとトラブルなく遊べたり、学校の集団行動ができたりします。“ちょっとした支援”が、その子の可能性を大きく広がります。

子ども達は地域で 生きていく。 だからもっと地域に 密着した活動を

私たちの目標は、地域

に密着した活動をしていく中で、当事者と社会がお互いを認め合える社会をつくることです。子どもたちには、仕事を持ち、自力で生活できるようになってほしいです。でも現状は、グループホームの利用や一人暮らしはごくわずかです。ほとんどは一般事業所で働いているものの、親と同居しています。発達障害のある人の中には支援が必要にもかかわらず、障害者手帳を交付されない場合もあります。子どもたちが自立していくための環境を整えるにはまだまだ課題が山積みです。

子どもたちが生きていく地域で、関わる人々からの理解が得られ、必要な支援を受けて自立した生活が送れるよう、地域に根ざした活動を続けていきます。

〈取材日：平成24年8月2日〉



「たつの子」運動会

ケース2 専門家と親・学生による療育

知ることが第一歩～みんな

幼少期の療育で、 自閉症のお子さんの成長の 可能性を広げていきたいです

特定非営利活動法人ADDS(Advanced Developmental Disorders Support)

共同代表

くま ひと み
熊 仁美さん



心理学に基づく早期療育

自閉症のお子さんをもつ ご両親をサポート

私たちは「日本中の自閉症があるお子さんとそのご家族が、子育ての中で可能性を最大限に広げられる社会」の実現を目指しています。自閉症のお子さんは、応用行動分析という心理学に基づいた集中的な療育を受けることで、症状の改善や発達の促進がみられることが分かっています。

私たちは、主に就学前のお子さんとそのご家族に、療育のサポートを行っています。お子さんと一番長く関わるのは親御さんですから、親御さんが主体的に療育を進められることを重視し、1年間で知識や実践的なスキルをお伝えします。

これまでに約50家庭にサービスを提供するなかで、「言葉が話せるようになりました」「通常学級に就学できそうです」といったお言葉をいただくこともあり、非常にやりがい

を感じています。

**日本には専門家が
足りない。専門性を
切り分けて受け皿
を増やしたい**

アメリカでは発達障害児は約100人に1人の割合との統計が出ており、国による発達障害児・者への制度も整っています。療育の専門家として

の資格もあり、それを仕事にできます。しかし、日本は圧倒的に専門家の数が少なく、国の支援といっても療育センターで週に1～数回の指導が受けられる程度で、地域ごとにはばらつきもあります。

発達障害の支援には、様々な知識と実践スキルが必要なため、全てを専門家が行うと莫大な時間や費用がかかります。日本で、幼少期の集中的な支援を根付かせるためには、専門性を切り分けて役割分担をする必要があると考えています。

例えば、お子さんの発達の評価や、療育のカリキュラム作りは、専門知識や臨床経験の積み重ねが欠かせません。しかし、カリキュラムにそって直接お子さんに支援を行う人材は増やすことができます。そこで、学生に実働部分を担ってもらっています。心理学や医学、特別支援教育の知識はなくても、規定の研修を受け、認定試験で知識やスキルを認められた学生に家庭教師のような形で

家庭療育のサポートをしてもらっています。学生時代に自閉症の正しい知識をもち、お子さんに関わっていれば、将来自分が社会人や親になったときに、発達障害の理解者になれる可能性も期待できます。

チームによるサポートの輪を 広げたい

現在は、児童デイサービスのスタッフに人材養成研修を行ったり、公開セミナーを行ったりもしています。発達障害にはライフステージ毎の課題があります。私たちは就学前の支援に携わりますが、それ以降の支援をしている団体とのネットワーク作りの必要性も感じます。さらに、適切な支援にたどり着くのが難しいという課題もあります。そのため、啓発活動にも取り組み始めています。

今後とも、私たちの活動に共感してくれる人々の輪を広げ、チームとして取り組むことによって、自閉症のお子さんをご家族をサポートし続けたいです。

〈取材日：平成24年7月27日〉



学生たちの実践トレーニング

ケース3 被災地での発達障害児・者支援

で支える発達障害～

発達障害児の文化を 守ること、寄り添うことが 大切なのです

一般社団法人ぶれいん・ゆに～くす い どう
代表 伊藤 あづささん



あそびの広場の子どもたち

発達障害ならではの 被災地におけるニーズ

東日本大震災で被災されたご家族の支援として、石巻市にある「かもめ学園」等で発達障害のお子さんを持つお母さんの相談相手をしたり、夏休みの2～3日、お子さんをお預かりする「遊びの広場」を展開したりしました。夏頃にはお母さんたちが疲れきっていたんです。発達障害のお子さんは環境の変化が苦手という特徴がありますから。

また、物資の支援もしました。発達障害のお子さんがあるご家庭には、必要なものや届け方が違ってきます。音に過敏なお子さんのためのイヤーマフ。時間の見通しが苦手なお子さんのためのタイムタイマー。視覚情報によるコミュニケーションが得意なお子さんのためのホワイトボード。雑然とした環境が苦手でパーソナルスペースが必要なお子さんのためのパーティション・ドーム型テント。日頃からのつながりのおかげで企業からたくさんの寄付を受けることができ、大変助けになりました。

生活用品も届け方に配慮が必要です。自閉症のお子さんにとって、お母さんと長時間行列に並ぶことは難しいのです。普段からのネットワークを生かして、どこにどのご家族がいるか把握し、必要な物資を直接届けることが必要でした。

私たちがやっていることを 広く知ってもらうことが必要

ご助力下さったのは企業だけではありません。発達障害の情報共有のために運営していたツイッターやブログで知り合っていたお母さん方、またそのご友人からも様々な配慮をいただきました。

当時、仙台市では甘い食料品の入手が困難でした。そんな状況を知って山口県から、チョコレートやキャラメルを大量に送っていただき、実際にお会いしたことはない方からも、子どもたちが喜ぶ甘いお菓子を送っていただきました。

多くの人々に私たちの活動を応援していただける情報発信が欠かせないことを震災時に痛感させられました。私たちがやっていることを福祉以外の人にも、地域の外の人にも知ってもらいたい。もっともっと応援してくれる人を増やしていきたいと思っています。

自閉症の子は、「ユニークな脳を持っている人」と認識しています

発達障害のある人は、得意不得意が特に目立ちます。自閉症のある人の場合、環境から必要な音(情報)だけを拾い上げ、頭の中で整理することが苦手です。でも、視覚による情報を理解するのは得意なことが多いのです。ですから、発達障害のお子さんがパニックを起こしてしまったり、コミュニケーションできなかったりする時は、彼らにあった伝え方ができていない私たちの方が未熟であると認識しています。

被災地に限らず、発達障害のある方の文化を守り、その文化に寄り添うことが私たちの役目だと思っています。

〈取材日:平成24年7月27日〉



あそびの広場、お母さんたちのおしゃべり会



書籍紹介

『学生パワーで地域を元気に』(2011年5月)

■お問い合わせ先／全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター TEL:03-3581-4656